The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『雨夜談抄』の人物比定
Author(s)	川渕, 紗佳
Citation	詞林. 2022, 71, p. 13-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87132
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『雨夜談抄』の人物比定

川渕　紗佳

一、問題の所在

『雨夜談抄』は、宗祇が著した『源氏物語』の注釈書である。帚木巻のみを対象としており、その中でも雨夜の品定めを中心に据えて注釈を施している。雨夜の品定めとは、五月雨の夜に宮中の宿直所で開催された光源氏・頭中将・左馬頭・藤式部丞によって交わされた女性談義の場面を指す。『雨夜談抄』の全百十四注記のうち、七十二・八パーセントに相当する八十三注記が、この雨夜の品定めの部分の注釈である。

『雨夜談抄』の中でも、雨夜の品定めに施された注釈では、特徴的な注記が確認できる。一例として【資料1】を提示する。

【資料1】『雨夜談抄』(1)

みやつかへにいてたちておもひかけぬさいはひとりいつるためしともおほかるならしなと

是はきりつほの更衣にあたれり

【資料1】で立項されているのは、左馬頭が語った女性論の一部である。左馬頭は「中流階級の家で大切に養育された娘が、出仕して思いがけない幸いを得る例も多い。」と語る。この発言に対し、『雨夜談抄』では「是はきりつほの更衣にあたれり」と、桐壺更衣の境遇と似通っていると判断し引き当てた。このように、『雨夜談抄』は、物語内で理念的な女性論を述べている部分に、具体的な人物を当てはめる手法を取る注記が十八例確認できる。以下、【資料1】に類似する注記を人物比定の注記として扱う。なお、人物比定の判断基準としては、『源氏物語』に登場する具体的な人物名を挙げた上で、「……にあたるなり」「……にあたれり」など、「あたる」という動詞を用いて注記を施しているものと定義する。ここで【資料2】において雨夜の品定めで語られる女性論において、どの部分に、どの人物が比定されているか、列挙する。

【資料2】『雨夜談抄』の人物比定一覧

①かたちおかしくうちおほとき……末摘花
②なりのほれとももとよりさるへきすちならぬは……藤典侍
③またもとはやんことなきすちなれと……末摘花、空蟬
④又すりやうといひて……軒端荻
⑤なま〳〵のかんたちめよりも……明石上
⑥みやつかへにいてたちて……桐壺更衣
⑦もとのしな時代のおほえうちあひ……女三宮
⑧うちあひてすくれたらんもことはり……薄雲女院
⑨さて世にありと人にしられす……夕顔
⑩ちゝのとしおい物むつかしけにふとりすき……藤式部丞の妹
⑪かたちきたなけなくわかやかなるほとの……木枯らしの女
⑫ことかなかになのめなるましき人の……指喰いの女
⑬たゝひたふるにこめきて……紫上
⑭つねはすこしそは〳〵しく……花散里
⑮うしろやすくのとけき所たにつよくは……葵上
⑯えんに物はちしてうらみいふへきことをも……夕顔
⑰すへてよろつのことなたらかに……紫上
⑱さしあたりてもおかしともあはれとも……朧月夜

人物比定の注記で取り上げられている人物は、全部で十六名確認できる。この比定されている人物のうち、雨夜の品定めのみに登場するのは、⑩藤式部丞の妹、⑪木枯らしの女、⑫指喰いの女の三名である。また、雨夜の品定めよりも前に物語内で登場しているのは、⑥桐壺更衣、⑧薄雲女院（藤壺女御）、⑮葵上の三名で、比定されている人物の過半数が雨夜の品定めの前半部で展開される女性論の後に登場する人物と分かる。また、末摘花（①③）、夕顔（⑨⑯）、紫上（⑬⑰）のように、二度比定される人物も確認できる。

掲出した人物比定の注記については、『雨夜談抄』の基礎的情報を簡潔に述べた資料でも言及されている。高橋亨氏は、次のように評価した(2)。

『源氏物語』帚木巻の文脈にそって、詳しく文意の解説をしている。（中略）雨夜の品定めの女性論を、後の物語中に登場する女性に逐一あてはめているのが特色で、多くは強引な付会だが、作品内の文脈で解釈する試みは、新しい注釈の方向を示すものである。

「強引な付会」としながらも、具体的な人物を引き当てながら読解する手法を「新しい注釈の方向を示すもの」としている。一方、中野幸一氏は以下のように述べている(3)。

内容は、はじめに「帚木」巻の冒頭文を掲げて巻名の由来について説き、以下は本文の一部を抄出して、その文意の注解をかなり詳細に施している。方法は堅実な注釈的態度で、語句の説明のみならず、文章の鑑賞から巻の構成にまで言及しており、著者の読解の深さを思わせる。とりわけ雨夜の品定めの中にあげられた女性を、以後の巻々に出る女君たち（中略）に引き当てて評していることは、雨夜の品定めの読み方として興味深く、『源氏物語』の女性論としても一顧に値しよう。

人物比定の注記で示されている内容を『源氏物語』の女性論に結び付けて解釈し、「一顧に値しよう」と評価している。

このように、両氏の論からは、人物比定の注記は特質的なものであり、『雨夜談抄』を考える上で重要なポイントであると分かる。その一方で、『雨夜談抄』の人物比定に対して、「強引な付会」「新しい注釈の方向を示すもの」「女性論としても一顧に値しよう」と様々な見解を示しており、未だ評価が一律でない様子も窺える。このような現状の下、人物比定を分析した論考として重要なのが、次の稲賀氏の論である(4)。

人物比定は、この時期の注釈の中で広く根強い影響力を持っている。その人物比定を観察すると、二つのレベルに分かれる。（中略）『帚木別注』（稿者注：『雨夜談抄』の別称）は人物比定論やモデル論ではない。また女性論の部分を扱ってはいるが、女性論の書でもない。『帚木別注』は品定めの部分の注釈である。だから女性論とは直接関係のない物語本文も引用され、それについての注が書かれる。（中略）「……にあたれり」という認識の方法は、品定めの議論に参加している人物が思い浮かべる関連人物についても使われる。一方、品定めの議論に参加している人物が思い浮かべているわけではない関連人物についても「……にあたる」ということばが使われる。

稲賀氏は、「品定めの議論に参加している人物が思い浮かべているわけではない関連人物」を比定しているものと、「品定めの議論に参加している人物が思い浮かべる関連人物」を比定しているものという二種類のレベルが存在することを示した。人物比定の注記の中にも、性質が異なるものが存在することを示した点が重要といえる。しかし、人物比定の注記がどのような意図を持っているか、またどのような表現を用いているかについては、検討の余地が残されている。

『雨夜談抄』を扱った先行研究では、他の注釈書との差異に着目した論考が多い(5)。他の注釈書と比較することで、人物比定を行う手法の源流や帚木巻に注記を施した意図について明らかにしていた。しかし、人物比定の判断基準や性質については、先行研究で明らかになった点を踏まえた上で、

更に検討を加える必要があるだろう。それらを検討することで、室町中後期において帚木巻の雨夜の品定めがどのように読解されていたかを知ることができる。そこで、本稿では、『雨夜談抄』の人物比定の注記について再検討を行う。人物比定の判断基準や性質を踏まえて、宗祇周辺の源氏学について考察を加える。

二、『雨夜談抄』における雨夜の品定めの定義と視点

まず、【資料3】を用いて、『雨夜談抄』が雨夜の品定めをどのように定義しているかを確認する。

【資料3】『雨夜談抄』

女のこれはしもとなんつくましきはかたくもあるかなとやう〳〵なん見給ひしるたゝうはへはかりのなさけにてはしりかきおりふしのいらへこゝろえてうちしなとはかりはすいふんによろしきもおほかりとみ給れとそもまことのそのかたをとりいてんえらひにもるましきはいとかたくや

女のこれはしもといふより頭中将の詞也　（中略）これより品さためなり　此しなさための事は世間の女の心をおほくいひあつめたる人か源氏の君にあひたてまつりて世にはかゝる心ある女もありといふをかたり奉る事なり　頭中将は世をくはしくしり給ふほとはなけれと源氏の君よりはすこしこのかみにて女のさまもよくしり給へる故にかたり給へる也　おほかた此巻は心得かたきにや侍らん　たとへは当時もとし老たる人は五十年六十年の間のことふとてはその人の心はかくこそありしかさやうにこそ侍りしかといふかことき事なり　それに当時の人の心こしかたの人の心に似たるかあるかことし　このことはりにもとつけはわつらひなくこゝろえらるゝ物也

立項本文は、頭中将が光源氏に対し、女性観を説く場面である。頭中将は、「この人こそはと、非の打ちどころのない人は滅多にいないのだと、分かってきた。ただうわべだけ飾った、文や応対の作法は身分並にわきまえている人は多くいる。しかし、本当に筆跡や応対の優れた人を選び出そうとした時に、必ず漏れることの無いほど素晴らしい人は、めったにいない。」と述べる。

雨夜の品定めは、光源氏・頭中将・左馬頭・式部丞の四人で行われた女性談義の場面を指すのが一般的である。この時点では、まだ左馬頭と藤式部丞は登場していないが、宗祇は「これより品さためなり」とし、雨夜の品定めは、この頭中将の発言から始まったと指摘した。その上で、雨夜の品定めについて「世間の女の心をおほくいひあつめたる人か源氏の君にあひたてまつりて世にはかゝる心ある女もありといふを

かたり奉る事なり」と説く。これは、雨夜の品定めを「世間の女性についてよく知っている人が、光源氏に世の中の女性の有様を語り聞かせるもの」と位置付けているのである。

そして、この場での頭中将の立場について、「世をくはしくしり給ふほとはなけれと源氏の君よりはすこしこのかみにて女のさまもよくしり給へる故にかたり給へる也」と示す。頭中将は「世間を詳しく知っているという程ではないが、光源氏よりは年上で、女性についてもよく知っているから語る」のである。この部分に関連して、【資料4】の注記を挙げる。

【資料4】『雨夜談抄』

なりのほれとももとよりさるへきすちならぬは世の人のおもへることもさはいへとなをことなり

此段は源氏の君頭中将にとひ給へるはやんことなきか世くたりたると下つかたの人のなりのほるとはいかゝわくへきとの給へるをおりふし左の馬のかみまいりあへるか物よくいふ人の世中の人のありさましれる人なれは中将左の馬頭にゆつりいはせらるゝなり　心はなりのほる人をは世間よりは昨日けふまて下臈にてありし人そなと思ひいへとすてにはや官位もあかりたるうへはおとすへきにあらすといふ事をなをことなりとはいふなり　惟光女藤典侍　これにあたれり

左馬頭と藤式部丞が加わった後の場面で、注記が施された部分である。「なりのほれとも…」からの発言は、左馬頭の発言と取る説と、頭中将の発言と取る説とに分かれているが、『雨夜談抄』では左馬頭の発言としている(6)。

ここで注目したいのは、「左の馬のかみまいりあへるか物よくいふ人の世中の人のありさましれる人なれは中将左の馬頭にゆつりいはせらるゝなり」の部分である。雨夜の品定めは、世間の女性について良く知っている人が光源氏に女性論を語り伝える場面であると解説されていた。【資料4】において、左馬頭という「世中の人のありさましれる人」が登場したために、頭中将はストーリーテラーとしての役割を譲ったとある。この雨夜の品定めを主導する「語り」を担う人物として、左馬頭が重要視されていることが【資料3】【資料4】から分かる。

三、『雨夜談抄』の人物比定〔一〕

第二節において、『雨夜談抄』が雨夜の品定めにおいて、左馬頭を重要視していたことを示した。同じ現象が、人物比定の注記からも確認できる。

【資料5】『雨夜談抄』

かたちきたなけなくわかやかなるほとのをのかししはちりもつかしと身をもてなし文をかけとおほとかにことえ

りをしすみつきほのかに心もとなくおもはせつゝまたさやかにも見てしかなとすへなく（後略）

此一段の塵もつかしと身をもてなしふみをかけとことえりしてといふ所は伊勢のみやす所なと是に似たるへし　ことえりとは詞をえる儀也　御息所は文かき上手にておはしけるなり　これより下とりなせはあためくといへるは木枯の女にあたるなり　はしめのなんとすとは第一の難といふい詞也　此段のつゝき惣は一段なれとそのこと〳〵のかはりめにそこはそれにかれはこゝに似たる様の事あるへし

左馬頭が、理想の妻は得難いと語る部分の一部である。左馬頭は、「年若い美女で、行儀もよく、男女とのやり取りも情趣をわきまえているような女が、上手く欠点を隠しているものだ。たおやかで女性らしいと思っていると、情趣にこだわりすぎて色めかしい。これがまず初めの難と言えるだろう」と語る。

この左馬頭の発言に対し、『雨夜談抄』では、六条御息所と似通っている部分が多いことを認めながらも、木枯らしの女を当てている。木枯らしの女は、雨夜の品定めの後半部、左馬頭の体験談に登場し、よく情趣を理解しているが、浮気性で信頼できないという欠点のある女性として語られる。この左馬頭の発言を、木枯らしの女との体験談を踏まえた上での発言であると考え、「木枯らしの女にあたるなり」と注を施したのだろう。このように、宗祇は左馬頭が語る際に思い浮かべたと考えられる人物を比定している。

一方で、左馬頭以外の品定めの参加者が、思い浮かべた人物は比定されないという特徴も確認できる。具体的な女性の名前が示されるにもかかわらず、比定されない注記を【資料6】【資料8】において示す。【資料6】は、左馬頭の発言を受けて、光源氏が葵上を思い浮かべる部分の注記である。

【資料6】『雨夜談抄』

いてやかみのしなとおもふにたにかたけなる世をと君はおほすへし

君とは源氏の御事なり　あふひの上ちゝは左のおとゝ母宮はみかとの御いもうとなれは上の品にはならひなけれと源氏の君の御心にあはぬ所ありし儀也

【資料7】『源氏物語』帚木巻(7)

すぐれて、きずなき方の選びにこそ、およばざらめ。さるかたにて、捨て難き物をは」とて、式部を見やれば、「我がいもうとゞもの、よろしき聞えあるを思ひて、の給ふにや」とや心得らん、ものも言はず。「いでや、上の品と思ふにだに、難げなる世を」と、君はおぼすべし。

左馬頭が、妻として理想的な人物を見つけるのが難しいと語るのに対して、光源氏は「上の品の女であっても、理想的な人物は得難い」と思う。この部分について、宗祇は、光源氏は葵上を思い浮かべていると指摘しながらも、葵上を比定はしていない。次に示す【資料8】は、頭中将が葵上を思い浮かべた場面の注記である。

【資料8】『雨夜談抄』

わか心あやまちなくて見すくさはさしなをしてもなとかみさらんとおほえたれとそれさしもあらし

（前略）下の詞にともかくもたかふへきふしあらんをのとやかに見しのはんよりますことあらしとの給ひてわかいもうとの葵上をほめておほすなるへし

【資料9】『源氏物語』帚木巻

「わが心、あやまちなくて、見過ぐさば、さしなほしても、などか見ざらん」と、おぼえたれど、それ、さしもあらじ。ともかくも、たがふべき節あらんを、のどやかに見忍ばんより外に、ます事あるまじかりけり」と、言ひて、「わがいもうとの姫君は、この定めにかなひ給へり」と思へば、君のうちねぶりて、言葉まぜ給はぬを、「さうく〳〵しく、心やまし」と思ふ。

【資料8】の立項本文は、左馬頭が、妻が夫を上手く操縦することで夫婦仲は長続きすると語ったのを受けた、頭中将の返答の一部である。頭中将は、「気に入っている女が、頼りにできない浮気な疑いがある場合は大変だろう。夫の方に過失がなく、相手の不実を見過ごし、浮気癖を直してでも夫婦仲を続けてゆけないことはあるまいと思われるが、必ずしもそうはいかない。男女いずれに問題があるにせよ、夫婦仲のうまくいかないようなことが起こった場合には、気長に我慢する以外に良策はない。」と述べる。

この部分では、頭中将が葵の上を思い浮かべていることが、『源氏物語』の本文でも示されている。しかし、「わかいもうとの葵上をほめておほすなるへし」と述べるのみで、比定はしていない。

【資料5】では前述した通り、左馬頭が理念的な女性論を語る際に、実際に思い浮かべた人物を比定している。しかし、【資料6】【資料8】では、光源氏や頭中将が思い浮かべている人物については比定されていない。

雨夜の品定めの前半部において語りを主導するのは、左馬頭である。そして、左馬頭の思い浮かべた人物が比定され、その他の品定めの参加者が思い浮かべた人物については、言及するにとどまる。宗祇は人物比定の注記を施す際、意図的に左馬頭の思考のみを辿っていることが認められる。つまり、左馬頭の思い浮かべた女性のみ比定したのは、理念的な女性

論を主導するストーリーテラーとして、左馬頭の思考を重視しているといえる。

左馬頭が雨夜の品定めを主導する「語り」を担う人物として、その存在が重視されていた点は、第二節でも確認した通りである。『雨夜談抄』の特性である人物比定は、その場面で誰が主導的に語るかという問題と結びついていたのである。

四、『雨夜談抄』の人物比定〔二〕

第三節では、左馬頭の思考を重視した人物比定の注記を確認した。しかし、『雨夜談抄』の人物比定の注記には、左馬頭が認知していないと考えられる人物を比定しているものも確認できる。むしろ、【資料2】を確認すれば、左馬頭が思い浮かべることのできない帚木巻以後に登場する女君たちを引き当てている注記の方が圧倒的に多い。その中でも、本稿では二度比定されている末摘花と紫上が取り上げられる注記を中心に検討する。

始めに、末摘花が比定されている注記を取り上げる。【資料10】は『雨夜談抄』の人物比定の注記の中で、最初に位置するものである。ここでは、まず人物比定の基本姿勢を説いている。

【資料10】『雨夜談抄』

かたちおかしくうちおほときわかやかにてまきるゝことなきほとはかなきすさひをも人まねにこゝろをいるゝこともあるにをのつからゆへつけてしいつる事もあり（後略）

是は品さためのの第一なり（中略）此段は すゑつむ にあたるなり 末摘 はよろつをくれたる所おはしけれと琴を引給ひしを大輔の命婦か源氏の君にかたり申たりし事よく似たるなり　又此段のはしめにかたちおかしくわかやかなるほとといへり すゑつむ はかたちあしき人也　ちかふやうなれとこと〳〵く似る事はなけれと一所なれと詮とする所へにたるをはそれにあたるといへる也

まず、人物比定の方法として、「一所なれと詮とする所へにたるをはそれにあたる」と説いている。異なる部分があるとしても、理念的な女性論の主題と物語の内容が似通っていると認められれば比定できると判断している。つまり、雨夜の品定めで説かれている女性論と、以後の巻々に登場する女性は完全に一致するものではないことを、最初に認めているのである。

宗祇は、完全には一致していないとしても、似通う部分があると判断した女性を当てている。これらは、後の巻の展開を踏まえた上で施した注記と言えるのではないだろうか。

次に、【資料10】の立項本文と人物比定を確認する。立項

本文は、頭中将の発言の一部である。頭中将は「女性は、結婚前の暇を持て余している時分に、芸事を一人前に身に付けることがある。世話をする人は、劣った面は隠して言わず、良い面をとりつくろって伝える。そのため、男女の仲になると、がっかりしないで済むことはない。」と言う。

この頭中将の発言に、宗祇は末摘花を引き当てた。その理由として、大輔命婦が光源氏に末摘花について伝え語る場面によく似ているからだとする。この場面を次の【資料11】で提示する。

【資料11】『源氏物語』末摘花巻

故常陸の親王の、末にまうけて、いみじうかしづき給ひし御むすめ、心細くて残り居たるを、物のついでに、かたり聞えければ、「あはれのことや」とて、御心とゞめて、問ひ聞き給ふ。「心ばへ・容貌など、深きかたは、え知り侍らず。かいひそめ、人疎うもてなし給へば、さべき宵など、物ごしにてぞ、語らひ侍る。琴をぞ、懐しきかたらひ人と思へる」と聞ゆれば、「三の友にて。いま一種や、うたてあらん」とて、「われに聞かせよ。「父親王の、さやうの方に、いとよしづきて、物し給ひければ、おしなべての手遣ひにはあらじ」と思ふ」と、語らひ給ふ。

これは【資料11】で、大輔乳母は末摘花を、慎み深い性格で、琴の名手であると光源氏に語り聞かせる。しかし、実際には末摘花は取り柄のない愚鈍な女君として登場する。これを受けて、宗祇は大輔命婦の発言を注記内で取り上げた。そして、「をくれたるかたをはいひかくしてさてありぬへきかたをはつくろひてまねひいたす」という、頭中将の発言と似通っていると判断したと示す。「雨夜の品定め」での発言から、『源氏物語』の別の巻の場面との共通性を見出して、具体的な人物を比定したのである。

【資料12】も末摘花巻の内容を踏まえた上で施された注記である。

【資料12】『雨夜談抄』

またもとはやんことなきすちなれと世にふるたつきすくなく時世うつろひておほえおとろへぬれは心はこゝろとしてことたらすわろひたることもいてくるわさなれはとり〳〵にことはりて中のしなにそをくへき

是は末摘にあたるなり　さきにも末摘にあたるあれとそれはしわさについてなり　是は種姓のくたるたとへなり　うつせみも納言の子なから受領の北方になれはあたるへきにや　このまへの段よりすゑまて大略馬のかみかことは也

立項されているのは、左馬頭が女の品について解く場面である[8]。左馬頭は「元は高貴な家柄であったも、時世に恵まれず、時勢に流されて衰えたならば、気位は保てたとしても行き届かない都合の悪いことも出てくるだろうから、それぞれに判断して中の品としておくべきだ」と述べる。

この部分にも、宗祇は末摘花を比定した。【資料10】では末摘花の性質を踏まえて否定したが、【資料12】では元は良い家柄であったが没落したという末摘花の経歴を踏まえて比定している。【資料11】でも語られている通り、末摘花は故常陸宮に大切に養育されていた娘であったが、常陸宮の死後は後見となる人物がなく、宮の姫君としては分不相応な暮らしをしていた。また、帚木巻の後半で登場する空蟬も、大納言の娘でありながら、受領の後妻となった経歴からこの部分に比定できると説いている。つまり、同じ末摘花を比定した注記でも、【資料10】では性質によって比定されており、【資料12】は経歴によって比定されている。

宗祇は、帚木巻以後の内容を踏まえた上で、注記を施していることが分かる。言い換えれば、宗祇の視点は『源氏物語』全体を見通しており、雨夜の品定めで語られる女性論と後の巻の展開は密接な関係にあると考えていたのである。この『源氏物語』全体の内容を踏まえながら、帚木巻に注釈を施す姿勢は『雨夜談抄』の人物比定以外の注記からも確認できる[9]。

他の人物比定の注記からも、宗祇が帚木巻以後の内容を踏まえた上で、注記を施していることが窺える。顕著な例を【資料13】において示す。【資料13】は紫上を比定した注記である。

【資料13】『雨夜談抄』[10]

すへてよろつのことなたらかにえんすへき事をは見しれるさまにほのめかしうらむへからんふしをもにくからすかすめなさはそれにつけてあはれもまさりぬへし

すへてといふはまへのあまたの事をもてかんようよかるへきやうをかけるなり　此段は紫上にあたれりさるにより世にたくひなき人とはいへるなるへし

左馬頭が語る女性論の一部である。「女性は万事寛容であることが重要である。嫉妬はほのめかす程度に、恨みごとはそれとなく言う程度にとどめておくのが良い。それによって、女に対する愛情も増すものだ」と語る場面である。

宗祇は、ここに紫上を引き当てた。『源氏物語』では紫上が嫉妬している場面が度々確認できるが、それらは欠点としては語られていない。むしろ、紫上は『源氏物語』全体を通して肯定的に評価されている人物であることは、周知の事実であろう。宗祇の注釈書である『種玉編次抄』でも「世にたくひなき人とはいへるなるへし」と説く。これは、【資料14】で挙げる『源氏物語』御法巻の本文に影響を受けたものだと考えられる。

【資料14】『源氏物語』御法巻

致仕のおとゞ、あはれをも、折過ぐし給はぬ御心にて、かく、世にたぐひなく物し給ふ人の、はかなく亡せ給ひぬることを、口惜しく、あはれに思して、いとしば〳〵、とひ聞え給ふ。

致仕大臣が、紫上を亡くした源氏を弔問する場面である。ここで、紫上は「世にたぐひなくものしたまふ人」と評される。『源氏物語』中で「世にたぐひなき人」と評されるのは紫上のみである。宗祇は御法巻の表現を受けて注記を施していたと考えられる。

宗祇は帚木巻以後の内容や表現を踏まえた上で、具体的な人物を比定していった。『源氏物語』全体の内容や表現を理解した上で、帚木巻の雨夜の品定めに人物を比定したのである。

【資料13】の他に、紫上を比定する注記が一例確認できる。

【資料15】『雨夜談抄』

たゝひたふるにこめきてやはらかならん人をとかくひきつくろひてはなとかみさらん心もとなくともなをし所ある心ちすへし

これは天性心たてのおもふまゝなるはあるへくもなけれはかやうに又一段をかけるなり　こめきとはちいさきにあらす　巨の字なり　おほきやかなる性をいふなり　紫上のおさなおひたちなとこれにあたるなり

立項されているのは、左馬頭が語る女性論の一部である。「ただ一途に子どもらしく素直な人を、何かと足りないところを補ったとしたら、どうして妻にしないだろうか（いや、妻にする）。頼りない部分があっても、仕込み甲斐がある気持になるはずだ。」と述べる。

宗祇はここでも紫上を引き当てている。但し、ここで注目したいのは「紫上のおさなおひたち」があたるとしている点である。しかし【資料13】が紫上の性格を元にして引き当てているのに対し、【資料15】では生い立ちという、紫上の経歴を引き当てている。【資料10】【資料12】で確認した末摘花と同様に、比定するための要素が異なっているのである。第一節で例示した【資料1】も、宮仕えに出仕し幸いを得たという経歴に着目して、桐壺更衣を引き当てていた。また【資料3】で比定されていた藤典侍は、身分と性質に基づいて比定された注記である。つまり、引き当てる基準も、その女君の性質・容姿・経歴などそれぞれ異なっているのである。

五、人物比定の源流―「七毫源氏」との関係性―

第三節で検討した左馬頭の思考を重視した人物比定や、第

四節で検討した帚木巻以後に登場する女君たちを引き当てた人物比定の注記は、それぞれ基準が異なっていることが明らかになった。この異なる性質を複合的に判断した人物比定が行われたのは、宗祇が示唆を得た先行注釈の人物比定も、異なる性質を複合的に判断したものだったからではないかと想定できる。しかし、『雨夜談抄』に先行する注釈書で、雨夜の品定めに具体的な人物を比定する注釈方法と、類似する注記が確認できるものは現存しない。

但し、東山御文庫蔵『源氏物語』（以下、本稿では「七毫源氏」と呼ぶ）の書入れ注が、宗祇の人物比定と似通っていることが稲賀敬二氏によって既に指摘されている(11)。稲賀氏の指摘によれば、「七毫源氏」において、雨夜の品定めの物語本文に対する注記として、具体的な登場人物を比定するものが確認できる部分は十七箇所である。【資料15】において、「七毫源氏」の指摘を列挙する。「七毫源氏」の本文を示した後、その下にどのような書付け注が付されているかを示した。

【資料16】「七毫源氏」の人物比定一覧(12)

Aいとなへてはあらねと我も思し合はする事やあらむ……心、玉かつら
Bいとしかなりなむいとさはかりならむあたりには……詞、末摘花
Cす両といひて……諸国任国事也、伊予介女也
Dなま〳〵のかんたちめよりは……空蟬、夕顔
E宮つかへにいてたちて……桐壺更衣
Fこと人の言はむやうに心えす仰せらるると……女三宮
Gさて世にありとしも人しらす……夕顔
Hちゝのとしおひ……軒端荻
Iはかなくしいてたることわさも……空蟬事歟
Jいてやかみの品と思ふたに……葵
Kかならすしもわか思にかなはねと……葵
L所せく思ふ給へぬたに……六条御息所
Mなよひかに女（にょう）としとみられは……馬頭と数奇女当此品、又源典侍此類歟
Nことか中になのめなるましき人の……馬頭嫡妻
Oたたひたふるにこめき……紫上
Pつねにすこしそは〳〵しく……六条御息所
Qいまはたゝしなにもよらし……花散里

この「七毫源氏」の人物比定のうち、『雨夜談抄』の人物比定と同じ人物を指摘している注記は、C・E・F・G・M・N・Oの七例で、異なる人物を指摘している注記は、D・H・I・Pの四例である。このほかに、A・B・J・K・L・

Qの六例は、『雨夜談抄』では具体的な人物を比定していない部分で、「七毫源氏」が人物比定を行っている部分である。比較すると、「七毫源氏」と『雨夜談抄』の人物比定は、引き当てている人物が異なるものの方が多い。しかし、理念的な女性論に具体的な人物名を当てはめようとする態度は一致していると言える。

雨夜の品定めに具体的な人物を比定する鑑賞態度について、稲賀氏は「七毫源氏」に似通った人物比定論が確認できることを踏まえた上で、次のように述べている。

> 彼（稿者注：宗祇）が雨夜談抄の中で扱った、品定めの女性の特色と物語中の具体的な女性とを結びつけて鑑賞批評する方法も、宗祇が自分で思いついた事ではなく、先人の説の中でその示唆をえたものであったらしい。宗祇が七毫源氏そのものに曽つて遭遇したとは云わないが、七毫源氏に書き入れられている注と根源を等しくする古注・講釈などに、宗祇はどこかでめぐり合っているようである。

現在、『雨夜談抄』に先行するもので、雨夜の品定めに具体的な人物を比定する注釈方法と似通った注記は「七毫源氏」で確認できるのみである。現代まで伝わることは無かったが、当時の注釈や講釈の中で、雨夜の品定めに『源氏物語』中の登場人物を比定して読解するという方法が『雨夜談抄』以外にも存在していたと考えられる。

六、まとめ

以上、『雨夜談抄』の人物比定について再検討を行った。

雨夜の品定めは「世間の女性についてよく知っている人が、光源氏に世の中の女性の様を語り聞かせるもの」としている。最初は頭中将の語りから始まり、その後左馬頭が女性論を主導するようになる。これについては、頭中将は「世間を詳しく知っているという程ではないが、光源氏よりはよく知っているから語る」とされ、「世の中を良く知っている」左馬頭が現れると、ストーリーテラーの役割を譲ったと説かれる。ここから、左馬頭を雨夜の品定めを主導する人物として、重要視していたことが分かる。人物比定の注記でも、左馬頭が思い浮かべた人物のみが比定されていた。理念的な女性論を主導するストーリーテラーとして、左馬頭の思考を重視していたことがわかる。

一方で、宗祇が『源氏物語』全体を踏まえた上で、帚木巻の雨夜の品定めに具体的な人物を比定した注記も確認できる。『源氏物語』全体の内容や表現を理解した上で、帚木巻の雨夜の品定めに人物を比定したのである。これは、前節で確認した『雨夜談抄』全体の注記姿勢にも通ずる。

『雨夜談抄』の人物比定は、複数の判断基準を持つもので

あるということが考えられる。現存していない複数の解釈や講釈において雨夜の品定めに具体的な登場人物を引き当てて鑑賞する態度が存在したことが想定できた。

人物比定の注記からも、宗祇周辺の源氏学の動向を推察することが可能であろう。これについては、今後の課題としたい。

【注】

（1）『雨夜談抄』の引用本文は、中野幸一編『明星抄　種玉編次抄　雨夜談抄』（源氏物語古注釈叢刊第四巻、武蔵野書院、一九八〇年）を使用し、便宜上傍線を施すなど、稿者が改めた部分がある。

（2）日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八三年）「雨夜談抄」項参照。

（3）中野幸一編『明星抄　種玉編次抄　雨夜談抄』（源氏物語古注釈叢刊第四巻、武蔵野書院、一九八〇年）『雨夜談抄』解題参照。

（4）稲賀敬二「品定めと帚木後記説―『覚勝院抄』をめぐって―」（『源氏物語注釈史と享受史の世界』新典社、二〇〇二年〈初出〉実践女子大学文芸資料研究所叢書編『源氏物語古注釈の世界―写本から版本へ―』、実践女子大学文芸資料研究所叢書Ⅰ、一九九四年三月、汲古書院）

（5）伊井春樹「『雨夜談抄』と『源氏物語不審抄出』」（『源氏物語注釈史の研究　室町前期』桜楓社、一九八〇年）。稲賀敬二「品定め十八段区分の源流と展開―兼良・宗祇の源氏学の周辺―」（『源氏物語の研究　物語流通機構論』笠間書院、一九九三年。初出「品定め十八段区分の源流と展開―兼良・宗祇の源氏学の周辺―」（『国語と国文学』五十二巻一一号、一九七五年一一月）。

（6）『花鳥余情』や『弄花抄』、『細流抄』など諸注も左馬頭の発言と取っている。宗祇周辺の源氏学においては、この発言を左馬頭の発言とする説が主流であったと考えられる。

（7）『源氏物語』の引用本文は、宮内庁書陵部蔵三条西家本を底本とする日本古典文学大系を使用し、便宜上傍線を施すなど、稿者が改めた部分がある。

（8）注6参照。

（9）拙稿「『雨夜談抄』考―宗祇の『源氏物語』注釈態度を中心に―」（『詞林』六十九号、二〇二一年四月）。

（10）【資料13】で提示した注記は注9で言及した論考でも紹介したが、本稿でも改めて提示する。

（11）稲賀敬二「品定め十八段区分の源流と展開―兼良・宗祇の源氏学の周辺―」（『源氏物語の研究　物語流通機構論』笠間書院、一九九三年。初出「品定め十八段区分の源流と展開―兼良・宗祇の源氏学の周辺―」（『国語と国文学』五十二巻一一号、一九七五年一一月）

（12）稿者は、「七毫源氏」の本文については確認できていないため、注11で示した稲賀氏の論考を参考に【資料14】を作成した。

（かわぶち・すずか
本学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）